

山野の草花と本の「一期一会」を伝えたい

植物水彩画一木一草展 **村瀬進さん** (吉身一丁目)

展示する水彩画作品にタイトルではなく「本」をテーマにした散文を添える独特のスタイルで、定期的に個展を開いている市内在住の村瀬進さん取材しました。

草花や木をテーマにした水彩画と「本」の紹介

市内在住の村瀬進さんが、駅前総合案内所で「植物水彩画一木一草展」(9月27日～10月3日)を開きました。

駅前総合案内所での絵画作品展は珍しくありませんが、村瀬さんの作品展は少し趣が違います。その理由は作品二つのテーマに「本」があることです。

展示されている水彩画は「ブルーベリー」「カンナ」など散歩や旅行先でスケッチした草花を描いたものが中心ですが、絵画作品には描いた植物の名前と解



センニンソウ

子ども時代を原点に退職後の趣味を楽しむ

村瀬さんは、小学生の頃はSF小説が好きでした。高校生の時には夏目漱石の本を夢中で読んでいました。選択授業の

美術では先生から草花を観察して描く面白さも教えてもらいました。現在のライフスタイルの原点は、子ども時代の経験にあると村瀬さんは言います。

草津市役所で働いていた時に司書の資格を取得しました。その頃、公立図書館の整備計画が具体化して、建設や運営に携わるようになりました。40年前のことです。その後は県内の公立図書館で仕事をしてきました。

現役最後に鈴鹿山系の麓にある自治体の図書館で働いていたこともあり、退職の時に「絵を描く、山のぼり(山歩き)をする」と第2の人生について、公言したそうです。公言した以上、家でごろごろしているわけにはいきません。町や山を歩いて目についた草花を水彩画で描くようになりました。



リンドウ

にもなるといいます。本に登場した草花を描くこともあれば、描いた草花に本を連想することもあるそうです。

もともと読書が好きだったこと、司書という職業柄、数えきれないほどの本に親しんできた経験から、描いた草花と本を結びつけるキャプションを添えることで、見た人に「本との出会いを提供したい」と思い「植物水彩画一木一草展」がはじまりました。

独自のこだわりとライフスタイルを発表する展覧会は、市内で年2回、市外県外でも機会があれば積極的に展開しています。絵を見に来てくれる人、キャプションを楽しみにしてくれる人、いつも来場する常連さんものいるそうです。夢だった本(画文集)も2冊目を出版しました。

村瀬さんは「私にとって司書は『やりたい』もので、リタイアは『やりたい』に挑戦するチャンスになりました。読書の秋、皆さんも図書館で新しい自分を見つけては」と話していました。

村瀬さんの水彩画作品とキャプション

(画文集「草花と本と」より抜粋)

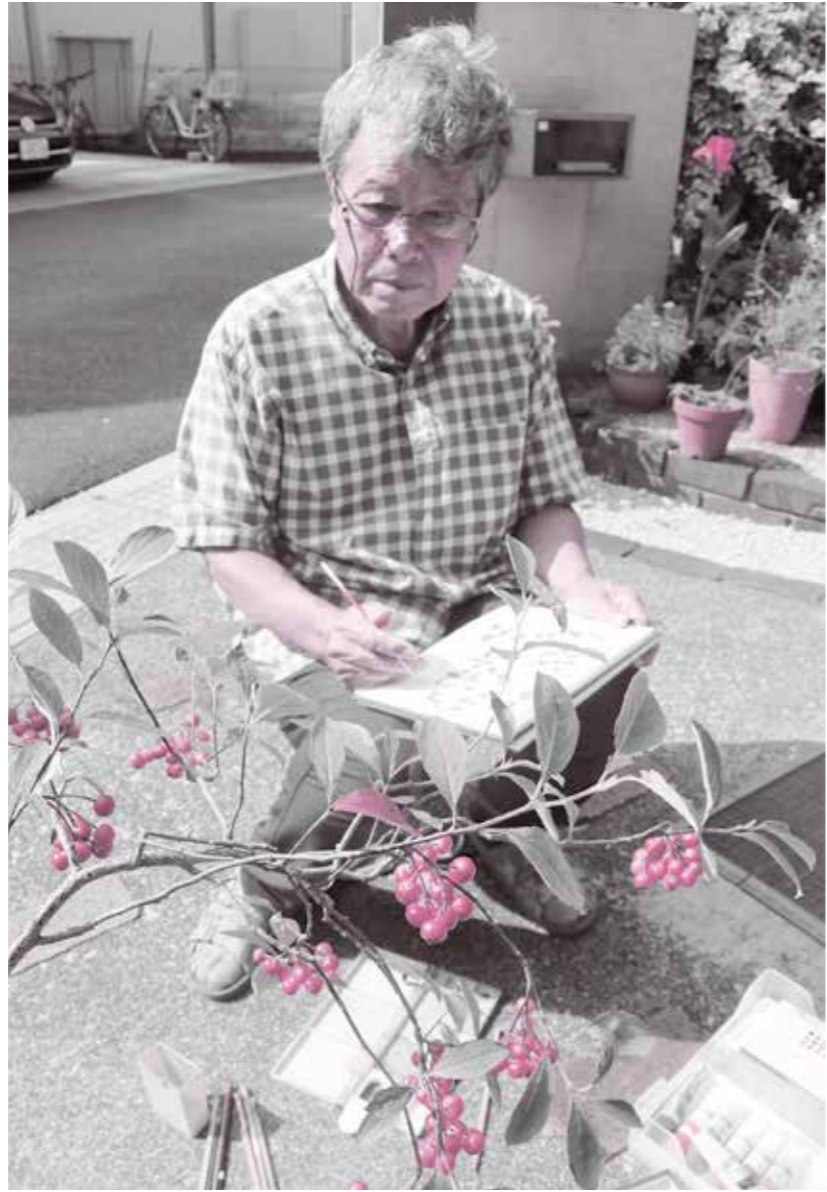


クレソン

アブラナ科の植物で原産地はヨーロッパですが、現在では結構野生化して自生しています。

近くの目田川を観察すると……、果たしてありました。そのクレソンを描きました。

滋賀県出身の藤本 恵子さんは「比叡を仰ぐ」で文学界新人賞を受賞しましたが、彼女の作品に「クレソン」(講談社)があります。現代史と相関しながら、60年代以降の変貌していく湖西の農村を舞台にしています。常に何かを求めながら、得ることのできない農村の青年を描いていますが、今日では都会に生きる人間にも共通するものが……。



↑村瀬進さん
←駅前総合案内所で開かれた「植物水彩画一木一草展」
←村瀬さんが出版した画文集「草花と本と」

「やりたい」に合える本 図書館で見つけよう

村瀬さんが、これまでに描きた水彩画は約1,300枚



ダイヤモンドジソ